

THE 飯茶碗「益子」(栃木県)

柳宗悦や河井寛次郎とともに民藝運動を創始したことで有名な人間国宝の陶芸家、濱田庄司が居を構えたのが益子です。江戸後期に、幕府への献上品を焼くための「御用窯」として栄え、明治以降も東京や関東近郊の消費を支え、東北地方の瓦の窯としてもよく使われていたそうです。THE 飯茶碗「益子」は、益子六釉の1つである糠白釉を茶碗全体に掛け、土味をおさえて仕上げました。

窯元：陶庫 道祖土和田窯
締土(しぼりつち)/糠白釉(ぬかじろゆう)

THE 飯茶碗「清水」(京都府)

名前の由来は、清水寺への参道である五条坂界隈に窯があったこと、と言われています。京都の料理人や茶人のもてなしの器、嗜好品として、様々な要望に応じてきた清水焼は、多種多様な技法や素材そのものより、手作業でそれをつくり続けてきた陶工達が主役であると言えます。江戸時代前期に活躍した野々村仁清や尾形乾山など、多くの名工が独自のデザイン・技法を生み出し、今日に至っています。THE 飯茶碗「清水」は、様々な色絵付けの下地となった白土の化粧掛けを用いてつくられています。

窯元：伊藤製陶所 赤土/粉引

THE 飯茶碗「有田」(佐賀県)

今から約400年前、国内で初めての磁石が発見された、磁器発祥の地として有名です。有田焼は、国内はもとよりヨーロッパの王侯貴族を深く魅了し、「伊万里」と呼ばれて純金と同じ価値で取引されていたそうです。有田の磁器の透き通るような白さは、貿易商であったオランダ連合東インド会社の高い要求に応えた、当時の陶工たちの研究の賜物であったと言えます。THE 飯茶碗「有田」は、柄杓掛けという釉薬の掛け方を用いてつくられています。

窯元：藤巻製陶 天草陶石 白磁/柄杓掛

THE 飯茶碗「瀬戸」(愛知県)

日本六古窯の一つであり、「瀬戸物」は陶磁器を指す一般名詞にもなるほど、東日本で広く流通しました。中期では、瀬戸が釉薬を施した陶器の唯一の産地だったそうです。良質な粘土と、ガラス原料の珪砂が豊富に含まれる瀬戸陶土層は世界有数の陶土と言われ、瀬戸の多種多様なやきものを生み出す源となっています。THE 飯茶碗「瀬戸」は、古染土(貫入土)と呼ばれる瀬戸ならではの陶土を用い、貫入(釉薬のヒビ割れ)が見えやすい透明釉を施しました。

窯元：マルミツ陶器・柴田製陶所
古染土/透明釉/貫入

THE 飯茶碗「信楽」(滋賀県)

千年以上の歴史を誇る日本六古窯の一つであり、耐火性と可塑性に優れた陶土が付近の丘陵から豊富に採れたことにより「大物づくり」の焼成技術が高く、水瓶や火鉢などに加え、大きな狸の置物でも有名です。日本の文化として栄えていた近畿地方の中心にあり、古代の主要道でもあったため、陶工にとっての理想郷とも言われた産地です。THE 飯茶碗「信楽」は、自然の土味や土の白さを楽しむ為に、古信楽土の細目を用い、釉薬を掛けずに焼き締めています。

窯元：ヤマトツ陶業
古信楽土 細目/無釉/焼き締め